

精神科看護史の諸問題

岡田靖雄

精神科で働いた看護者による回想録がいくつかでており、また浦野シマ『日本精神科看護史』（牧野出版、東京、一九八二年）の著もある。だが、精神科看護史の基本的視点はそれらのものでははっきり定式化されていない。

わたしの『私説松沢病院史』（岩崎学術出版社、東京、一九八一年）は、患者の処遇ならびに看護人（これは看護夫・看護婦の総称である）の処遇を二本の柱としている。

患者の処遇という視点は、松沢病院でわたしが受けてもつていた「不潔病棟」での患者の惨状および立津政順「戦争中の松沢病院入院患者死亡率」（一九五八年）から受けた衝撃による。看護人の待遇に目を向けたのは、病棟主任であった北島治雄さん（一九三三年見習看護人）から聞かされた戦前・戦中の物語りによるところが大きい。

ところで、一七九三年にフィリップ・ピネルがピセート

ル病院で患者を鎖から解放したことが近代精神医学の第一歩とされているが、それは実質的に看護長ピュサンの実践によるものであった。呉秀三による巣鴨病院改革の大半も、医師よりは何人かのすぐれた看護長に支えられていた。このように、精神科医療史の中軸は精神科看護史であったといつてよい。他方で、一般の看護史は男の看護者にほとんどふれず、精神科看護史に関する記載も少ない。さらに、一般に看護者の勤務時間・給料についての記載も乏しい。

まず松沢病院について看護人の勤務時間をみよう。『神経学雑誌』第三二卷（一九三〇年）に、ドイツから呉主幹に看護についての問い合わせがあったのに対する回答がのっているのによると、「看護人はいづれも左の如く勤務す。第一日は午前九時より夜十二時迄病室勤務。夜半十二時より午前六時迄病室就寢、第二日午前六時より午後九時迄病室勤務、それより午前六時まで病室就寢、第三日午前六時より午後六時まで病室勤務、其後より夜半十二時まで病室就寢、〔夜半十二時より午前九時まで病室勤務〕第四日午前九時より次の日午前九時まで休息、第五日は第一日に同

じ以下順繰」。この勤務形態は巢鴨病院時代からほぼ同様であった。

これに対して給与はどうであったか。一例をあげると、一九二二年十月に見習看護夫で日給六〇銭、翌年一月看護夫で日給六五銭、同六月より二等看護夫で日給六八銭、十二月より、一等看護夫で日給七〇銭、一九二三年中の賞与は三月に三円、十二月に三三円であった。当時大工の平均手間賃が一日三円五三銭、巡査の初任月給が四五円であった。同年に紡績工業および衣類身回り工業の織工の一日平均賃金が〇・九三七円であり、就職して数年の看護人給が紡績女工にほぼ並ぶことになる。宿舎その他の条件もきわめて劣悪であった。『読売新聞』一九〇三年連載の「人類の最大暗黒界癡癲病院」は東京府内の七精神科病院の実情をあげだしているが、そこには、看護人が自分の食費をうかせるために患者の食事をかすめている様子が描きだされている。

そこで男女ともに看護人の定着はきわめてわるい。年内に大半が入れ代わり、看護技術の蓄積もうすいものになっていた。労働争議も精神病院ではかなり多かった。労働運

動史には一九〇三年四月「巢鴨病院看護婦一六名スト」と記載されているが、この記載の具体的事実はまだ確認できていない。これは東京精神病院のことであったかもしれない。一九二〇年代からは精神科病院での労働運動について確実な資料が残っている。そして、一九五六年の新潟精神病院ストライキは、戦後における病院ストライキの先駆をなすものであった。医療労働運動史のなかで、精神科病院における運動の占める比重は大きい。

戦前における精神科看護人の養成は、主として院内の講習所でなされていたが、その教課を終了する人はごく少数であった。

東京府癲狂院―東京府巢鴨病院の初期の看護長では、軍人あるいは警察官の経歴を有する人が目だつ。こういふなかで、日本赤十字社第一回看護養成所を卒業した清水耕一（一八七三―一九三五）は、「松沢の至宝」と称されるに至った。清水の著『新撰看護学（附精神科看護学）』は、一九〇八年に初版を出し、一九三三年には第一〇版を出すに至った。

「愛情と忍耐」をその標語的代表とする戦前の精神科看

護の理念には、古い道徳の匂いも強いが、現在も学ぶべき多くのものも含まれている。

(精神科医療史研究会)

帝国大学医学部薬学科の発展

中 室 嘉 祐

奈良時代中国大陸から漢方医学が伝来し、和漢薬とその製剤を用いる漢方医学が徳川末期まで続いた。鎖国となる
と長崎の和蘭商館の医官を通じて和蘭医学が伝わり、とくにポンペの努力により、文久元年、日本最初の洋式病院長崎養生所が開院し、彼は日本各地から集まった医学生に西洋医学のほか、薬室にて処方箋調剤をも教えた。後任のポードインもポンペ同様であった。医学生は日本各地へ帰り、病院が処方箋調剤を行う医薬兼業の西洋医学・長崎式西洋医学(『日本医史学雑誌』第三五巻、一五三頁)を日本中に広めた。江戸では幕府の西洋医学所を興し、これは明治となると大学東校・東京帝国大学へと発展した。「明治となりポードインは浪華仮病院・国立医学学校病院(院長緒方惟準)へ転じ、後任のエルメリンス(院長高橋正純)の明治五年、文部省は学制改革を行い大阪を廃校とした」。